



「笹川杯作文コンクール 2010」～中国語で応募～ 第2回優秀賞作品

※原文に忠実に和訳しました。

「森田療法」から環境保護を考える

北京市 付如石

心理学者である森田正馬が作り出した“森田療法”に、私が初めて触れたのは2年前のことだった。当時は心身を調節するいい方法であると思っていたが、神経症、特に強迫神経症によく効くようである。より深く学ぶにつれて分かったことは、森田療法は単なる心理療法ではなく、むしろ先進的な哲学の理念であり、環境保護についても参考にするに値するということである。

“自然に従い、ありのままに”とは、森田療法の核心である。しかし、そのスタンスは、環境保護の“核心”でもあるのではないかと？日本は資源に恵まれず国土も狭いが、日本人は諦めることなく“自然に従い”、自らの弱点と向き合い、“ありのままに”素養の向上に努めてきた。外需主導の経済を発展させ、生態環境を保護することより、日本は世界の経済大国となったのだ。現在の日本は、経済も科学技術もとうに先進国のそれであり、“金山、銀山”がある。そして、今の日本には青々とした山と川がある—日本の森林率は世界でも上位であり、精緻で丁寧な農業は世界の模範となっている。

これとは逆に中国は、国土が広く豊かで、天然資源も総量は大きいのだが、一人当たりの占有量はむしろ不足している。経済発展の過程で自然環境を犠牲にし、一時的な経済成長と引き換えるようなことがあってはならない。“自然に従い、ありのままに”発展させる必要がある。人としての価値を十分に発揮して労働者の資質を高め、技術力、輸出力のある環境保全型経済を発展させ、グリーンの飛躍を実現しなければならないのだ。

森田療法についての現代の権威者である田代信雄教授によると、森田療法の最高の境地は“純潔な心”であるという。環境保護を行うにあたって必要なのは、正にこの“純潔な心”ではないだろうか？官僚Aが、個人の業績にすべく、大規模な不動産購入やイメージばかりの工事を行うのは、人力と財力の無駄であり、一種の“悪政”でもある。官僚Bが、環境保護のため、国民の生活水準を引き上げるため、緑化や生活に直結する事業を大に行うのは、私達が尊ぶ“純潔な心”があつてこそである。

“純潔な心”は、人間が最も自然に身につけているものであり、人類の生存がかかる宝物である。自然環境の保護が話題にされることは多いが、私達の精神を保護する必要性については、考えたことがあるだろうか？

少年時代を過ごした郷里は、風景が美しい村落だった。いつも仲間と池ではしゃいだり、魚を捕まえたりしていた記憶がある。しかし、その郷里も、今や池から異臭が漂い、魚など全くいなくなっている。自然環境の変遷に、私は少し感傷を覚えた。しかし、もっと傷ついたのは、人々の精神の変遷である。小さい頃、村人はみんな畑仕事をしていた。ご近所は仲が良く、みんなが自然環境の保護に気をつけていた。或いは自然環境を壊すようなことなど思いつかなかったのか、する機会がなかったのかもしれないが。工業化が進み、労働集約型産業が勃興すると、村人はこぞって稼ぎに出てしまい、村が寂しくなってしまった。人々の慌ただしい足取り、“鍵っ子”を見るにつけ、何とも言えない喪失感ともの寂しさを覚える。

人間は心から森林、海洋、青い空を愛するはずなのに、なぜ、無意識に、それどころか故意に壊そうとしてしまふのだろうか？森田療法に関する私の僅かばかりの収穫が、この文を読む方に環境保護という考えを啓発することができることを、私は心から望んでいる。また、中日両国民が互いに学び、助け合い、自然環境を共に保護し、私達共有の自然環境を保護していくことを、私は望んでいる。